

---

# STRIKE WITCHES KNIGHT OF STEEL

黒猫亭髑髏

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

STRIKE WITCHES KNIGHT OF STEEL

### 【Nコード】

N8703J

### 【作者名】

黒猫亭髑髏

### 【あらすじ】

1940年、連合軍第501統合戦闘航空団「STRIKE WITCHES」にある男が、赴任しようとしていた。男の名は、吉村貫一。扶桑皇国陸軍大尉であり、第501統合戦闘航空団部隊指揮官ミーナ・ディートリンデ・ヴィルケ少佐付戦術補佐官として基地に着任したのである。しかし、彼は、その時、知るよしもなかった。自分が、ウィッチたちを巡る恐るべき陰謀に巻き込まれ、自分の運命が大きく変化することを…。

## 第一話 ある士官の旅立ち（前書き）

この作品は、「ストライクウィッチーズ」のファンフィクションです。作者の技量の拙さにより、色々と誤りがあると思いますがどうかご容赦お願いいたします。

## 第一話 ある士官の旅立ち

「あいつほどの男がなぜ？」

扶桑皇国海軍航空隊付の高村一郎大尉は呟いた。1940年になつたばかりの冬のことである。

「それはわしも同意見じゃよ。出世も目前だと言うのに。」  
そう返すのは、彼の上官である宮本宗助海軍少将である。

「だが、過ぎてしまったことだ。一週間後には遣欧艦隊に同行して、横浜を発ち、数カ月後にはブリタニアのポーツマスだそうだ。」  
そう淡々と答えるのは、陸軍の秋山好信中将である。

「やはり、あの事件が関係あるのか。」  
この様な会話が続いて数分後、一人の青年が現われた。

「噂をすれば何とやらですな。奴が来ましたよ。」  
二人の上官にも臆することなく、吉村が軽口を叩く。

「お久しぶりです。宮本少将、秋山中将。」

そして二人の將軍に向かつて、姿勢を整えて軍隊式敬礼を行う。  
身長は高く、すらつとしており、整った顔立ちで、鼻が高く、銀縁の眼鏡を掛けている。

腰には、護身用の拳銃としてはやや大型にすぎるくらいのあるモーゼルM712を携帯し、手には、軍刀を携えていた。

モーゼルM712は、カールスラント製の自動拳銃であり、製造年からM1932とも呼ばれる拳銃である。世界で最古の部類に入る自動拳銃C96の最終生産型であり、セクターの切り替えにより、フルオート射撃が可能な拳銃であった。その大きさから、通常のホルスターではなく、ストックを兼ねた大型の専用ホルスターに入れる必要のあつた代物である。使用弾薬は、7.63×25。初速が速く、電話帳5冊分の厚さの鉄を貫通する拳銃弾である。装弾数は10発、弾薬の装填は、グリップによるものと、トリガー前部にあるボックスマガジンによるものが二種類ある。ブルームハン

ドルと呼ばれる細いグリップの為、反動が強く、正確に目標物に命中させるためには、熟練を要するものであった。扶桑皇国陸軍は、将校の護身用拳銃は、自前の調達が慣例であり、それぞれ個性の光った拳銃を携帯していた。

今しがた三人の話の種となっていたのは、この男であり、名を吉村貫一郎という。所属は陸軍であり、階級は、大尉。翌日には、本来であれば翌日に、少佐への任官を控えていた。しかし、今回の騒ぎで、任官が遅れてしまったのである。

奇しくも幕末に志士たちから恐れられた新撰組の中で、「新撰組最強の剣客」として知られる男と同姓同名を拝命したこの男は、「軍始まって以来の俊才」とも呼ばれ、その優秀な成績から士官学校卒業時、恩賜の軍刀を携わった人物である。

成績のみならず実戦指揮官としても非常に優秀な手腕を持ち、また部下からの信頼も勝ち得ていた。その為、将来の出世頭、将官候補生として、非常に有望視されていた。そんな出世街道まっしぐらの男の運命に、暗雲を立ち込めたのが、ヨーロッパにおける戦況であった。

1939年以来、地球は、地球外生命体「ネウロイ」の侵攻にさらされていた。ヨーロッパの大部分がネウロイによつて、蹂躪され、征服されていった。このまま、ネウロイに地球が征服されてしまうような状況を呈した中、それに一矢報いる形で登場したのが、ストライカーユニットを搭載した魔女たちによる機械化航空歩兵であった。1939年のスオムスにおける独立義勇飛行中隊を皮切りに、数多くの部隊が登場し、各地で戦果を挙げていった。その中でも連合軍で公式（あくまでも公式に）には最も早く設立された部隊、第501統合戦闘航空団、通称ストライクウィッチーズは、エーリカ・ハルトマン、ゲートハルト・バルクホルン、坂本美緒などと各国のE級ウィッチを揃えた精強な部隊であった。しかし、華々しい戦果を挙げる中で、ある問題が発生していた。正規軍と活動を共にする中で、現場レベルで擦り合わせ、交渉を行う人間の存在に欠

いていた。いままでは、遊撃隊もしくは先行部隊としての役割が主であり、正規軍との接触、共同作戦に乏しかった。しかし、部隊として華々しい戦果を挙げようになると、同時にその人物を獲得することが急務となっていた。当初、現場レベルの折衝などは、坂本美緒大尉及びバルクホルン大尉やミーナ少佐が行っていたが、その不在時には、当然それを行うべき人間の存在に欠いていた。また「空軍の英雄」ダウティング將軍肝いりの部隊であったものの、部隊の軍における地位は、その実績とは裏腹に低かった。

話を遡ること数ヶ月、ブリタニア空軍大将ヒューゴ・ダウティングの署名により、扶桑皇国陸軍宛に吉村貫一郎大尉の「ストライクイッチーズ」への引き抜きの辞令が届いた。しかし、辞令が届いて、軍内部は一気に紛糾した。その引き抜きの対象であった人物が、軍にとつて非常に貴重な人材であったとともに、「ストライクウィッチーズ」という得体の知れない部隊にその人物を送り込むことに陸軍上層部が難色を示したのだ。そのため、軍上層部は、吉村が、この辞令に拒否することを前提に、辞令を受理し、本人の意思に委ねると付け加え返信した。しかし、吉村は軍上層部の意向に反して、辞令を受諾を希望し、その旨を上層部に伝えたのだ。当然、拒否するものと思っていた上層部は、予想外の出来事に驚愕した。しかし、先方に既に、辞令受諾を申し渡した以上、拒むことが難しく、結局本人の意向を優先するほかなかったのである。軍上層部は、このことで話が拗れれば、両軍の間に、無用な軋轢を生み、ネウロイとの戦闘に支障が出ることを何よりも恐れていた。非公式にはいえ、すでに軍の人員もヨーロッパに派遣している。また、軍の最高指揮権者である扶桑皇国首相も同様の見解を示したため、この騒動は一気に収束へ向かったのである。

「俺はいまでも、納得がいかないよ。」

彼は、吉村貫一郎陸軍大尉にその疑問をぶつけた。

貫一郎と彼は、所属は異なるながらも、共に「肝胆照らす仲」であり、忌憚なく意見を吐ける間柄であった。悪友といってもいい間

柄であり、士官学校を通じて、共に何かをしでかす仲でもあった。共に博打がめつぼう強く、軍内での、麻雀、ポーカーでは、共に両軍の助っ人として、知られていた。先ほどいた二人の将官は、勤務に戻り、あとは二人の将校のみとなった。

「どうして、ヨーロッパへ行く必要があるんだ。よりによって、ストライクウィッチーズに！お前の実績ならここでも・・・」

「同じことができる・・・か？」

「！！！」

「確かに、ここにいれば、ヨーロッパへ行くよりも、出世にはメリットがあるし、役割もそれ以上のことができるかもしれない。」

「なら！、どうして！」

「一人の人間として、無関心で居なくなかったんだ。今、ヨーロッパでは、うら若き少女たちが戦場で己の命を懸けて、戦っている彼女たちは、元々、軍属でもなかった娘《こ》《こ》たちも含まれる話じゃないか。それなのに、俺のような軍で長年、禄を食む人間がこのような平穏な場所にいていいのか？」

一言も返すことができなかった。彼の気持ちが痛いほどわかってきたからだ。軍人にとって戦場で己の役目を果たす行為は、その本分である。軍人にとって、その役目が現状で果たせないことが、むしろ苦痛であった。だが吉村海軍大尉は、それ以外の気持ちも同時に感じていた。それを口にしようと考えたが、そこで思いとどまった。

「それにな、軍の中で、出世争いに興じているのに嫌気がさしたんだよ。俺はもう同胞を殺すようなことはしたくないんだ。」

「あれがまだ棘になっているのか。」

「……………」

「あれはこう言っちゃ悪いかもしれないが、不慮の事故だ。お前が気に病むことじゃない。」

「本当にそうか？」

高村が吉村の疑問の言葉に一瞬戸惑う。

高村が言葉を続けようとするとは、静かな足取りで、軍の建物を抜けた。

数日後、横須賀軍港に寄港したブリタニア王国海軍大西洋艦隊所属の戦艦「ドレッドノート」の近くにある青年将校の姿が目撃された。

続く

## 第一話 ある士官の旅立ち（後書き）

作者人生初の小説であります。やや技量に拙さの残る文章でありませんが、最後までお付き合いをお願い致します。話が進むごとに、大尉の心の闇、過去が明らかになります。大尉の人物像は『機動警察パトレイバー』に登場する特車2課第二小隊長後藤喜一警部補を思い浮かべて見れば分ると思います。昼行灯で切れ者の飄々としていて掴み所のない男です。

## 第二話 嵐の前の静けさ

「あなた方の好意には痛み入ります。」

ドレッドノートの艦長であるロバート・ルイス・スチープンソン海軍少将は答えた。

「いえいえ、我々扶桑とブリタニアは同盟関係にあります。これは当然のことですよ。」

その言葉を返したのは、横須賀基地司令である大熊茂伸少将だ。

「しかし大きいものですか。この艦船は。」

彼がそう驚くのも無理はない。戦艦ドレッドノートは、ブリタニア王国海軍が建造した軍艦である。所属は大西洋艦隊であるものの、ブリタニア王国の威信を世界に広げるために世界周航を敢行していた。全長約260メートル、排水量は最大で、72,800トンを超える規格外の巨大戦艦である。しかし設計そのものは十年前のものであり、海上での航空戦に対応した装備を持ち合わせていなかった。ブリタニア王国海軍がこの規格外の巨大戦艦の設計を最後まで進めたのも、上層部がステレオタイプかつオールドタイプの艦隊決戦の発想から抜けきれなかった所が大きい。事実、ドレッドノートに費やされた予算は航空機に換算すれば一艦で100機以上は優に生産できる巨大なものであった。

ドレッドノートがここ横須賀に寄港したのは一週間前のことである。横須賀は扶桑皇国海軍の重要基地の一つであるが、扶桑皇国は1902年からブリタニア王国と同盟関係にあり、その結果として基地を使用することができたのである。そして、この横須賀のドックで今整備を受けている。

もちろん、ドレッドノートの航海はこの一隻のみで行われるものではない。ドレッドノートの他に巡洋艦が数隻ついている。そして扶桑からブリタニアに物資、人員を輸送する遣欧艦隊がここからは同行することとなる。

遣欧艦隊の旗艦は「赤城」である。

全長約260メートル、排水量36,500トンである。航空機は通常66機搭載できるものであった。これと同型艦に天城がある。

「申し訳ありません。遅れました。」

そう言つて登場したのは、中肉中背の中年の男であつた。

「スチーブンソン少将、紹介しよう。こちらが今回の航海で遣欧艦隊旗艦「赤城」の艦長を務める杉田淳三郎君だ。階級は大佐だ。」

そして大熊少将は、杉田大佐の方に向きかえると今度はスチーブンソン少将の説明を始めた。

「杉田大佐、こちらが『ドレッドノート』艦長ロバート・ルイス・スチーブンソン少将だ。」

「よろしく願ひします。」

杉田大佐は朴訥に答える。

「ではまだ仕事があるのでこれで。」

と言つて、彼は二人の前から立ち去つていった。

もちろん、ドレッドノートの航海はこの一隻のみで行われるものではない。ドレッドノートの他に巡洋艦が数隻ついている。そして扶桑からブリタニアに物資、人員を輸送する遣欧艦隊がここからは同行することとなる。

遣欧艦隊の旗艦は「赤城」である。

「くそっ！また負けだ。」

艦内に、声が響く。

声の主は、艦の管制を担当する下士官の一人であるウィリアム・ホールデン曹長である。

「おいおい、負けが込んでいるからといって、大声を挙げるもんじゃないぜ。」

その声に、応酬するように答えるのは、トム・ボガード軍曹、通称ボギーと呼ばれる男である。

「そうそう。」

それに、相槌を打つのは、ハンス・マルクス伍長である。

「まあまあ、二人とも、それはさて置いて。」

その話から転換を計ろうとしているのが、通信を担当するジョン・ブラウン少尉である。

ブラウン少尉は三人の中で、リーダー格の男であり、艦内での事情に通じている人物であった。

四人は、ポーカーをしていた。

それもただのポーカーではなく、賭けポーカーである。

賭ける対象も、今日の食事、一ヶ月の給与と幅が広い。

現在、このポーカーで負けているのはウィリアム・ホールデン曹長。

目も当てられないほどの大負けを喫していた。

「知ってるか、今、この艦に搭乗している男の話。」

「ああ、あの伊達男のことか。」

「そうだ。ダウディングの親父の眼になつたあの男だ。」

この四人の話の中に出てくる「ダウディングの親父」とは、ブリタニア連邦空軍大将ヒューゴ・ダウディングのことであり、連合軍第501統合戦闘航空団の創設者である人物だ。かつては、初期空軍のトップエースパイロットであり、最前線を戦った「歴戦の猛者」として、知られている人物であり、その気さくで、飾らない人柄から、所属を超えて兵卒、下士官からは、「親父」と呼ばれ慕われる将官である。特に、その人物眼は、定評があり、いままで数多くの優秀な佐官を育てたことで知られていた。また、数多くの伝説、武勇伝を残している。彼が、佐官時代の訓練は、「地獄の入り口まで百歩行き」とまで称されるほど、激烈なものでもあった。彼を慕ってついてきた空軍の青年将校らが、その訓練の厳しさから、次々と脱走したことは、今でも、兵卒たちの語り草となっている。しかし、兵卒、下士官、将校からの人気とは裏腹に、軍上層部と折り合いが悪く、軍の中では非主流派に属していた。

「しかし、全くどうして……。」

「ああ、ダウディングの親父の目は厳しいからな。俺も不思議だ

よ。」

「全く……。」

「さて、これで最後の勝負だ。」

「よし！レイズだ。」

「悪いな！俺にもようやくツキが回ってきたぜ！」

ホールデン曹長の札は、ロイヤルストレートフラッシュ。他の三人は、フルハウスもしくはストレートだった。

「これで、さっきの負けはなしだな？」

「吉村大尉、もうすぐ、ポーツマスに到着致します。ただちに着艦の準備をお願い致します。」

ポーツマスは、ブリタニア連邦海軍の軍港である。ブリタニア南部に位置しており、ブリタニア海軍最古の基地であった。その為、何世紀もの間も、海軍の重要拠点として、防衛上重要な場所であった。連合軍によるネウロイに対する欧州大陸再奪還計画「レコンキスタ」も、ここを拠点として行われつつあった。現時点では、連合軍を保持する軍用機のほぼ七割、軍用艦の八割がここに終結しつつあった。

一人の少年水兵が、部屋の扉の前で、呼びかけている。

「了解した。少しも待つてくれ。」

吉村大尉は、身支度を素早く整えると、扉をゆっくりと開けた。

「お荷物をお持ちいたしましたでしょうか？」

「ああ、よろしくたのむ。」

少年水兵と共にゆっくりと出口まで歩いていく。

少年は、見るからに若く、まだ年端もいかにくらの年齢に見える。

「君！名前は？」

吉村大尉は、突然尋ねだした。

少年水兵は、その質問に一瞬たじろいだが、すぐに平静さを取り戻した。

吉村大尉にとっては、一瞬の時間潰しのような質問であったもの

だが……。

「ロバート・グレーヴスです。階級は、二等兵です。艦長の命を受けて、お手伝いにまいりました。」

「いくつになるんだい？」

「今年で、16になります。」

「家族は、どうしてる？」

少年は、突然、暗い顔になる。

「家族は、ネウロイの攻撃で、行方不明になりました。今もどこにいるのかわかりません。」

場の空気が重くなる。

「そうか、それは悪いことを聞いたな。すまない。」

「大尉はなぜブリタニアへ。」

「魔女のお姫様がたを救う騎士となるために。」

大尉は、少年水兵の質問に、冗談交じりで答える。

「はあ。」

水兵は、その答えにややあっけに取られる。

「先日、辞令で、ある部隊に赴任することになってね、それでちょうど扶桑に寄港していたこの船に乗って、ブリタニアへ向かっているところなんだ。」

「それで、その部隊っていうのは？」

「第501統合戦闘航空団だ。」

「ストライクウィッチーズ、ですか！」

少年水兵が一気に色めき立つ。

「知っているのか。」

「ブリタニア、いや、人類の英雄ですよ。彼女たちは。」

「あなただっただんですね。あの士官っていうのは。もう艦内は、あなたの噂で持ちきりですよ。」

「ずいぶん、俺も有名人になったものだな。」

「けだるそうに答える陸軍大尉吉村貫一郎。」

「でも、凄いことなんですよ。あの部隊、いや、ストライクウィ

「ツチーズに、赴任できるっていうことは。」

「そうゆうものなのかねえ。」

「不満なんですか。」

「いや、そういうわけじゃないんだが。」

その時、艦内に警告音が響く。

「南東の方向四〇キロメートルの方向に、未確認飛行物体を確認。総員直ちに戦闘配備に就いてください。」

## 第二話 嵐の前の静けさ（後書き）

魔女たちを支えた男の第二話です。

艦内の平和な様子を現しました。

次回、ネウロイ登場です。

### 第三話 第501統合戦闘航空団作戦本部

「全く、参謀本部も、国防省も何を考えている。」  
ブリタニア空軍大将ヒューゴ・ダウディングは、指を交え、親指を交互に交えながら、大声で怒鳴った。彼をここまで激怒にさせているのは、第501統合戦闘航空団“ストライク・ウィッチーズ”に対する軍や官庁の冷淡さである。

ヨーロッパ大陸からの撤退作戦であるダイナモ作戦が成功し、その結果として、ブリタニアに優秀な<sup>ウィッチ</sup>魔女たちが終結したのを機に、第501統合戦闘航空団を立ち上げたものの、軍における彼女たちの地位は依然として低かった。発案者であるダウディング將軍の軍内部における地位が低かったこともさることながら、軍中枢や官庁が未だに従来型の兵器（戦車、軍艦など）を重視し、その結果として、彼女たちにまわされるはずの予算が大きく縮小されており、いまだに部隊としての体裁を取れない程の状態が続いていたのである。現に今も、ポーツマス海軍基地の敷地を借りながら、訓練や整備などを行っている状況である。

軍からすれば、兵器として考えると不確定要素の多い魔女たちを実戦で使うことに対して非常に消極的であり、官庁からすれば、その不確定要素から兵士もしくは兵器として養成、運営していくのにいくらかコストがかかるのか分らないことから、いくらか戦果を挙げても割に合わないと思われる。そのような状態の中でも、ストライクウィッチーズは多大な戦果を挙げ、軍に十二分に貢献しているのである。

「あいつらは、軍内の歩兵論者や大艦巨砲主義者と手を組んで、目先の利益でしか物事を考えないのか。」

「將軍、そのような発言をなされては、ご自分の首が飛ぶことになりませんよ。」

大將の毒言を諭すように、さわやかな笑顔で発言をしたのは、ス

トライクウィッチーズの隊長であるミーナ・ディートリンデ・ヴィルケ少佐である。

ミーナ少佐は、前述したダイナモ作戦において、ヨーロッパ大陸からブリタニアに脱出した魔女ウィッチの一人である。隊長でありながらも、「スペードのエース」、フェルステン「女公爵の二つ名で知られるエース級のウィッチでもある。齢も15になるうとしていた。

「君には大分苦勞をかけているな。本当に申し訳ない。」

「いえ、今の私たちの地位があるのも、將軍のお陰でございますから。」

ダウティング將軍が毒を吐くように、今でも従来型の兵器の配備は、急ピッチで進められていた。まるで、この戦争が自分たちだけが戦っているかのように。最近では、海軍の巨大戦艦ドレットノートが就航し、今、世界一周の処女航海に出ている。

「まあ、ドレッドノートが就航してくれたお陰で、我々も人員が増やせることになる。」

「將軍、それはどういふことですか？」

少し間を置いて、ミーナ少佐が聞き返す。

「前々から各国に人材の調達する旨を示した辞令を出しておった扶桑皇國陸軍から辞令を受諾するという返事が来てな。今、その人員がブリタニアに向かっているといふことだ。君には、實質的に初めての部下となるが、どうか宜しく頼む。」

「まあ、仲間が増えるといふことですね。」

少佐が嬉しそうに言った。

「そうだ。」

將軍は言葉少なに肯定の返事を返した後、更に言葉を続ける。

「我々の部隊は、空軍、海軍、陸軍の部隊とは性質が異なる。そのため、様々な部署から様々な人員を確保していく必要性がある。今後、部隊の規模を拡大していく中で、その人員を君と共に管轄ができて、軍とも交渉ができる人材を取り込む必要があるのだ。」

「それで、どんな人なんです。新しくくる人って？」

「うむ、ここに資料がある。」  
そう言つと將軍は、事務机から封筒を取り出し、その中から数枚にもわたる資料を取り出す。

## データ

名前：吉村貫一郎

生年月日：1916年4月13日（満24歳）

出生地：扶桑皇国前橋

階級：特務大尉

所属：扶桑皇国陸軍第701特務戦術大隊

役職：戦術補佐官

## 備考欄

士官学校を優秀な成績で卒業。

能力、品格抜群につき当部隊へ着任させるものとす。

「まあ、ずいぶんと能力の高い方ですね。」

「そうだな。」

「でも、ただ能力が高いただけでしたら、將軍はここまで重用しないでしょう。ただ能力があるだけならば、他にも一杯適格な方はいらつしゃいますから。」

言葉は穏やかながらも少佐は笑顔で辛辣な言葉を吐く。

將軍は少佐の辛辣な言葉を返すように言つ。

「そうだな。それだけじゃないな。」

その時、ドアが突然開く。

「將軍！」

突然入ってきた基地の將校。

「今、会議中だ。馬鹿者。」

將校は申し訳なさそうに縮こまってしまつ。

「申し訳ありません、戦艦ドレットノートより通信です。至急基地本部へ来てください。」

「誰からだ。」

「吉村貫一郎大尉からです。」

**第三話 第501統合戦闘航空団作戦本部（後書き）**

ミナさん18歳（笑）ついに登場です。

## 第四話 敵襲来!

「艦長、本国ポーツマスより通信です。敵はやはりネウロイの様。参謀本部はここでネウロイを食い止めるとのことです。」

通信手の声が、管制室内に響く。しかし、その声はひどく震えていた。通信手は、その内容が、ドレッドノートを切り捨てるとも言えるような内容だったからだ。

「軍は、『我々に死ね』と言うのか？『ブリタニア軍人は反逆しない』と言うが、思わず反旗を翻したくなる。」

艦長は思わずそうばやく。ばやくのも無理はない。そもそも今回の航海は、より多くの予算を引き出したい海軍上層部とブリタニアの力を世界に示すという政治家のつまらない意向から行われたものだった。上層部としては、ネウロイの危機を利用して、ロンドン海軍縮小会議（1930年）以降、制限させられていた軍艦の製造をはじめとする軍備の拡張を行いたい腹であった。ドレッドノートは、その中でも十年來の計画から建造された軍艦であった。その大きさは世界最大といってもよいほどの大きなものであった。そして、ブリタニアの力を示すために、世界一周の航海が行われたのである。しかし、これだけ巨大な戦艦でありながら、艦の装備は、旧世代の対艦戦を想定したものであり、すでに時代遅れとなっていた。

「うむ、だがこのままだとネウロイが我が国に進攻してしまうぞ。見を決め込んで長くは持たないぞ。」

「ネウロイが我が国に侵攻するまでにこの距離から計算しますとあと一時間です。」

ある下士官がそう答える。

「くそっ、どうしたらいい。」

副長は拳を計器に突き立てる。

その時、室外から大きな声上がる。

「おい！今は非常時だ。部外者はおとなしくしている！」

どうやら管制室の扉の前で、一騒動が起きているようだ。

「おい、何があったんだ。」

副長は外にいた守衛の下士官に問いかける。

「副長！」

副長は、今の騒動の渦中になっている人物を見る。白いスラックススーツに、中折れ帽とこんな緊張している場面には、全く似つかわしくない服装をしている。しかし、その雰囲気は数多の修羅場を潜り抜けてきた歴戦の猛者だけが持ちえるものを纏っていた。

「軍曹、大尉を中に。」

「はっ、はい。了解いたしました。」

下士官は、副長の命令に釈然としない思いを抱きながらも、従う。

「艦長、吉村大尉をお連れしました。」

艦長は、吉村大尉に語りかける。

「大尉、大変なことになった。本来ならば機密事項だが、今は非常時だ。それに、君はあの501のメンバーの一人だと聞いている。ネウロイがここから数海里も離れていない海上に出現した。このままいけば、あと一時間弱で、わがブリタニアへ到達する。だが幸いなことに、501は今、帰港しようとしているポーツマスにいる。だが、<sup>ウィッチ</sup>魔女到着までに、彼女たちの準備を含めて数十分を要する。それに、わが艦の搭載している兵器ではまともにネウロイに太刀打できるほど強力なものではない。何か良い提案はあるかね？」

「あるには、あります。」

大尉は暗い顔をしてうつむきながら答えた。

「ですが、この戦術は、非常に危険です。間違えばこの艦どころかブリタニア本土を危険に晒す可能性があるものです。」

「吉村大尉、『神はサイコロを振らない』という言葉がある。この世に不確定な要素はない、という意味だそうだ。しかし、私はその言葉は傲慢だとさえ思っている。この世に不確定な要素というものは、現に存在する。ネウロイというものはそうだと思っている。むしろ私は、『どんな困難な状況にあっても、解決策は必ずある。』

救いのない運命というものはない。災難に合わせて、どこか一方の扉を開けて、救いの道を残している。』というドン・キホーテの作者の言葉をより好む。君がこれから話す戦術がどのようなもので、少なくともこの手詰まりの状況を打開するものだとは信じている。」

数分後、吉村大尉の戦術を聞いた管制室内の面々は、一様に重い空気となる。その戦術は、偶然に偶然を重ねてやっと成立するものであり、さらに敵が艦の真正面に来なければ成立しない作戦であったのだ

この重い沈黙の空気を打ち破るように発言したのは、艦長であった。

「みんな聞いてくれ、これから私はこのコインにすべての命運をかけようと思う。このコインが表であれば、私は、大尉の作戦を採用しない。だが裏であれば、大尉の作戦を採用しようと思う。」

艦の命運が、一つのコインに委ねられた。

艦長は、中立を保つためにコインを副長に委ねる。

副長は、コインに不正がないことを確認させ、コインを上に向けて投げる。

コインは、副長の手の甲にのり、副長はコインを手で覆う。

「結果は、どちらだ。」

管制室内で声上がる

室内の異常な熱気

結果は、裏であった。

「皆、コインは裏だ。我々は大尉の作戦を採用する。」

続けて副長は、命令を伝える。

「通信長、ポーツマス基地に繋げろ。」

「了解しました。」

「グレイブス二等兵、大尉を通信室にお連れしろ。」

とここまですが、数分前の出来事。

通信室に大尉と二等兵は入る。

通信長は、了解したと言わんばかりにすぐさま仕事に取り掛かる。  
「こちら戦艦ドレッドノート、ポーツマス基地応答してください！」

「こちらポーツマス基地、どうした。」  
むこうの通信回線は開いたものの、ネウロイ出現の影響かやや音声に濁りが入っている。

「先ほど、ネウロイを確認。あと数時間で、ネウロイは、ブリタニア本土に到達する。今から数分後、我々は攻撃をしかける。」

「了解した。援護要請は必要か。」

「ああ、今基地にいる第501統合戦闘航空団に要請を願いたい。」

「了解した。」

「あと、それにあたって、第501統合戦闘航空団所属吉村貫一郎大尉が、彼女らに対して伝えたいことがあるそうだ。501の秘匿回線に繋いでくれないだろうか。」

「了解した。」

「こちら連合軍第501統合戦闘航空団。所属、階級、名前をお願いいたします。」

「扶桑皇国陸軍大尉、吉村貫一郎だ。ヒューゴ・ダウティング大尉はいらっしゃるか。」

「了解いたしました。少々お待ちください。」

数分後、ダウティング將軍に、現在の艦がおかれている状況そして自分の戦術を伝える。

「危険なアイデアだが、今の状況であるならば非常に適切だな。よろしい了承した。ここにちょうどミーナ少佐がいる。彼女に情報を渡してやってくれないだろうか。」

吉村大尉は以外な人物の名前を聞いて、やや当惑する。

「彼女がここにいるのですか。」

「ああ、おるよ。さっきまで君のことを話していたよ。そこに今度のネウロイだ。」

そう言つと將軍は、回線を切り替える。

「今、通信を替わりました。私が第501統合戦闘航空団「ストライクウィッチーズ」隊長ミーナ・ディートリンデ・ヴィルケ少佐です。吉村大尉、状況を報告して。」

「今、ドレッドノートは、ドーバー海峡ブリタニア側から西七キロメートル地点に存在しています。あと一時間と少しでブリタニア本土に到達する距離です。そこで我々はドレッドノートを囿にして、あなたたちが到着するまでの間、霧を利用して時間稼ぎを行います。」

「ちよつと待つて！そのやり方だと数分ももたないわよ。私たちが到着するのは、速くても五〇分はかかるわ。」

吉村大尉は、その言葉を封じ込めるように、答える。

「いえ、大丈夫です。お願いいたします。」

大尉の力強い言葉に少佐は決断する。

「分かったわ。でも死なないでね。」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8703j/>

---

STRIKE WITCHES KNIGHT OF STEEL

2011年2月18日00時29分発行